

25 これでいいのか日本の政治家

1986年5月19日の朝日新聞に、「ノルウェーの新閣僚、19人中女性が8人」「女性比率40%党の方針」という見出しの記事が出ました。

ブルントラント首相と大臣の合計8人の女性閣僚の顔写真に、私の目は釘づけになりました。新内閣は、閣僚の女性の数で世界新記録なこと、国会議席の34%を女性が占めていること、が書かれていました。

その閣僚の顔ぶれを調べてみると、教育・教会相（日本の文科相）は中学校教員をしながら市議会議員を経て国会議員となった女性で、2人の母親。厚生大臣は国家公務員と市議会議員を兼務し、のちに内閣の政策顧問をしていた女性で、2人の母親。環境大臣は私と同世代の30代半ばの女性解放運動家……。

仕事や家庭をこなし市民運動をしながら議員も務めることができるなんて、夢みたい！ こんな社会が地球上にあるんだと知った私は、いっぺんにノルウェーびいきになりました。

ちょうど1か月前、男女雇用機会均等法が施行されたばかりでした。「機会の平等」だけでなく「結果の平等」を求めて日夜運動を続けてきた私たち女性運動団体の声は通らず、男女別の募集も許容される悪法でした（注1）。国会にロビー活動を続けていた私は、女性議員の極端な少なさに改めて気がつき、これでは女性たちの声が国会に届くはずはないと思っていましたから、ノルウェー新閣僚のニュースには、身震いするような感動を覚えました。

記事を切り抜いて本棚側面の一番目立つところに張りつけて、毎日、拝顔しました。神棚が大嫌いな私ですが、その後、この記事は神棚のごとき威光を放ち続けました。

翌1987年2月、都立駒場高校の英語科の教員室で生徒の相談に乗っていた私に、1本の電話がかかってきました。教員組合運動で知り合った粕谷照美参議院議員からでした。

「東京都議会議員の補欠選挙があるから出てほしい。あなたは、女性差別がなくならないのは女性議員が少ないからだと言っていたでしょう」

ほどなく、私は立候補を決意しました。私の背中を押したのは、本棚に張ってあったノルウェー新内閣の新聞記事でした。高校教員を退職する日、教室の黒板いっぱい描かれた「センセェ〜、さようなら、選挙がんばって！」の生徒のメッセージは、涙でぼやけて読めませんでした。

ノルウェーの女性政治家は運動家

都議になって初の質問は「男女雇用平等をすすめる都条例の制定を」。男性議員たちの下劣な野次の洗礼を受けてのスタートでした。その一方、休みを利用してノルウェーを訪問したら、私が熱望してやまない「結果の平等をうたった男女平等法」があるではありませんか。それに、私が取材で出会った女性政治家たちの、日本の政治家像とのあまりの違いに、頭がクラクラしました。

グロ・ハーレム・ブルントラント首相（1939〜）。4人の子の母親。7歳で労働党の子ども隊に入隊。ハーバード大学出の小児科医。望まない妊娠に苦しむ少女たちを診た経験から、70年代に中絶合法化運動の先頭に立ちます。1977年38歳で国会議員に。1981年、42歳で労働党党首。夫アルネは妻の洋服にアイロンかけをする保守党党员でした。

クリスティン・ハルヴォルシェン国会議員（1960〜）。会ったときは20代でした。白い木綿のTシャツに木綿のスカートでさっそうと現れました。子どもはまだ保育園で「今日は、私が迎えに行く当番なので、ちょっと話を急ぎますね」。国会議員になっただいさつはこうです。

「国政選挙の半年前、左派社会党の候補者リストのトップは党首で、2位は党を結成した著名政治家の名があがっていました。ところが男女交互に並べるということの党の規則があったので、2位を女性にしなければならない。そこで党は私を見つけ、推薦会議（注2）で決まりました。その国政選挙でリスト2位の私は次点となって代理議員に。その時、24歳です。そして1989年の国政選挙で当選しました」

2人の子どもがいた彼女の最重要政策は「保育園と学童保育の充実」でした。その後、左派社会党の党首、財務大臣などの要職につきます。でも、住まいはずっと労働者などが多いオスロ東側地区の質素な共同住宅でした（注3）。

グレーテ・ベルゲ大臣（1954〜）は、ジャーナリストからブルントラン

ト首相の政策アドバイザーに。1991年、首相から「子ども家族相に」と入閣を打診されたのですが、出産したばかり。悩んだ末に引き受けた大臣就任記者会見で、「子育てと大臣の両方をこなせなくては、今まで私のやってきた女性解放運動はいったいなんだったと言われるでしょう」。素敵な発言でした。

大臣就任中に2人目を妊娠・出産。ノルウェーは、当時1年間の育児休業をとれるようにはなっていたものの、大臣の育児休業は妥当かどうか、メディアを巻き込んでの大論争に発展。結局、出産をはさんだ3ヶ月の育児休業をとり、残り9ヶ月を夫のペール・リッツラーがとることで大臣を辞めずに済みました。

夫が育児休業中のある朝、私は自宅を訪問しました。朝食後、大臣のグレーテは電車に乗って職場へ。夫ペールはベビーカーに子どもを乗せて保育園へ。そんな場面取材して本に収めることができました（注4）。

ヒシュティ・コッレ・グロन्दール国会議長（1943～）。中学校の教員時代、保育園増設運動を始めました。市長に面会すると「保育園を増やしたいなら議員になったほうがいい」と言われて、20代で市議会議員に。中学教員は続けたままでした。私が取材をしたとき、彼女は国会議長でした。議長室に、小学生が使うトナカイ皮のリュックサックがあったので、「これ、あなたのですか」と尋ねると、「そう、重い書類を入れるのにはこれが一番。ええ、電車通勤ですよ。市民からよく話しかけられて、それが楽しいんです」（注5）



▲ノルウェー国会議長は、トナカイ皮の黒いリュックサック（足元に見える）で電車通勤

もっと女性議員を日本に増やさなくては

ノルウェーの女性議員の仕事ぶり、とくに男女平等政策のレベルの高さを知れば知るほど、日本で女性議員をもっと増やさなくてはと思うようになりました。そこで1992年、女性運動の同志たちと全国フェミニスト議員連盟を創設しました（注6）。その後、2期目の東京都議会議員の任期末に、細川護熙さんから日本新党に誘われて衆院選に挑戦する事態になりましたが、地元の杉並区を離れるのが嫌で、結局、無所属で出て惨敗。私は日本の選挙には向いていないことを思い知らされました。

その私が20年後に、秋田3区からの衆議院選立候補を懇願され、2か月にわたって断り続けたものの、ついに翻意をして立候補。この顛末は第1話から19話までに書いたとおりです。

映画「選挙」は喜劇のような悲劇

2014年夏、私は、映画「選挙」のDVD英語字幕版を携えて、ノルウェーに行きました。日本の選挙をノルウェー人に岡目八目の立場で観てもらって、その反応を通して、改めて日本の選挙を考えたかったです。

映画は、ドキュメンタリー映像作家の相田和弘さんが自ら監督・撮影を手掛けた作品で、「コメントなしの徹底した観察」です。被写体は2005年10月23日の神奈川県川崎市議会議員の補欠選挙に立候補した山内和彦さんで、彼の振る舞いはコメディアンのようなようですが、「これは日本の悲劇だ」とわかります。

山内さんの選挙と私の選挙とでは、市議会議員選挙と衆議院議員選挙という違い、首都圏と秋田という違い、自民党と民主党という政党の違い、人気絶頂政党と不人気の極の政党という違い、公募に応募した候補者と2か月にわたって説得された末に決意した候補者という違い、などなど、いくつか際立った相違点があります。それでもなお、この映画は、国政選挙・地方選挙の枠を超えた日本の問題点を、リアルに描きだしています。

2012年の衆院選での私の姿とダブった場面が多くて、思い出深い世界に引き戻されました。

私の衆院選初日は2012年12月4日。雪交じりの雨が降る朝、市役所前の掲示板に自分のポスターを張って、その前で第一声をあげました。

その日以降、毎日、朝7時から夕方6時まで車で遊説して、少しの休憩をはさんで夜7時からミニ集会、というのが日課。それを12月15日まで続けま

した。宣伝カーの助手席に座り、左側の窓をあけて左腕を振りながら右手でマイクを持って「衆議院候補の三井マリ子、横手生まれの三井マリ子です」と叫びました。巨大スピーカーからの叫び声が入りこまない雪の田んぼに拡散していきます。

手袋が雪で真っ白になり、しばらくするとその手袋が凍りました。凍った手袋をヒーターで乾かし、予備の手袋に替えて、また腕を振り、声を張り上げました。2、3日で左腕が上がりなくなったため、セーターの左腕にホカロンをベタベタはりつけてからコートを着るようにしました。窓は開けっぱなしですから、車内のヒーターを最高レベルに上げてても効きません。とにかく、凍傷とまではいかなくても、シモヤケ覚悟の連呼マシーンを演じました。

「これは選挙なの？ 彼は候補者なの？」

映画「選挙」は、2014年8月24日、友人のオーレ・G・ナルードと、妻のマグニ・メルヴェールと私の3人で観ました（注7）。



▲「議員はホビーです」と言う国立大学準教授兼市議会議員のオーレ

オーレは第24話に出てきますが、国立大学準教授のかたわら市議会議員、県議会議員と中央党の幹部を務め、現在は市長。マグニは、国立大学図書館長を経て、今、短時間勤務の図書館職員。彼女自身は議員経験がありませんが、国会

議員や地方議員の親戚、友人、知人を多く持っています。2人とも3度の来日経験があるものの、日本型選挙の知識はほとんどゼロです。

映画が始まると、「自民党 山内和彦」のタスキをかけた山内さんが、スピーカーと、「自民党 山内和彦」の大きなのぼり旗と、巨大な顔写真と名前が印刷されたポスターを張った看板、を持って田園都市線の沿線らしき駅前に現れ、マイクで語り始めます。

「小泉自民党の山内和彦です」

ワンフレーズに一度は「山内和彦」が挿入されます。通行人のほとんどが無関心に通り過ぎます。運動員がチラシを配布しても、受け取ろうとしません。交差点、スーパーの前などでも、「山内和彦」のオウム返しが繰り返されます。

オーレとマグニは、「これは本当に選挙なの？」「彼は本当に議員の候補者なの？」と口を開きます。

「体操では政策は伝わらない！」

オーレは無然顔で言います。

「誰も聞いていないじゃないか。だれも彼を見ようともしていないじゃないか。これが日本の選挙運動なら、まったく中身がない！（This is nothing!）。なんてくだらないことやっているんだ（This is just a bullshit!）。（私のほうを見て）マリ子もこんなふうに、自分の名前を叫んだりしたのか」

私は、ちょっと恥ずかしくなりましたが、うなずきました。私の衆議院選秋田3区は東京都全体の倍以上もの広さですし、選挙期間も市議の倍ですから、名前の連呼は、おそらく山内さんの倍以上でした（注8）。

駅前での名前の連呼が選挙運動で最も大切、などとはオーレには理解できないようです。何度も「ナッシング（中身がない）、ナッシング」とつぶやきます。選挙カーでも候補者名連呼が続けられるのを見て、言います。

「選挙カーで叫び続けるような、あのやり方は無意味だよ。あのよう、朝から晩まで叫び続けるのではなく、ジャーナリストと会って政策を話すとか、もっと違うことに時間とエネルギーを使わなければだめだ。1週間、あんなふうに走りまくって、彼はどういうメッセージを有権者に送れたというのだ」

山内さんは、地域の夏祭りで神輿をかつぎます。高齢者スポーツ大会でラジオ体操もします。国会議員や地方議員も一緒になって、まじめに汗を流します。山内さんは、自民党の県会議員といっしょに川崎市宮前区内30カ所の夏祭りを全部まわったそうです。

私も、都議会議員時代に、高円寺の阿波踊りや、杉並区内の野球大会や運動会に招かれました。主催者側は、議員は名前を売りたいために参加しているとわかっていますから、かならず名前を紹介してくれます。議員になると、給料をもらいながら名前と顔を売ることができるのです。

でも、ノルウェーの2人は、「ハアーツ」とため息をついたり、のけぞったり。「体操しても政策は伝わらないだろう」「ぼくは、こんな体操には絶対参加したくない」と怒り出します。ジョークの得意な彼も、国会議員や地方議員の神輿かつぎやラジオ体操は、ジョークにならないようです。

「投票用紙に候補者の名前を書くなんて！」

マグニ ポスターや旗には字が大きく書かれているようだけど、あれは何？

私 候補者の名前。

マグニ 候補者の？ 政党ではないの？

私 大きい字は候補者の名前。小さいのは政党の名前。

マグニ 日本の有権者は、どうして政党の名前でなくて、候補者の名前を覚える必要があるの？

私 日本の選挙は、個人の人気投票みたいなものなのよ。

オーレ どうして候補者の名前だけで、政策の違いがわかるの？

私 名前で政策はわからないけど、とにかく日本では、有権者が自分の手で投票用紙に候補者の名前を書かなければならないの。

マグニとオーレ 投票用紙に候補者の名前を書く！

オーレ ノルウェーでは、市議会議員候補の名前を覚えている人はまずいない。

ぼくだって首相や党首の名前は覚えてるけど、他の候補の名は覚えていない。

私 田中角栄という首相がいた。贈収賄で逮捕、有罪となった人。彼が亡くなった後、娘が立候補した。一度、選挙区に取材に行ったことがある。その人たちは代々、選挙といえば投票用紙に「田中」と書くことだったけど、真紀子さんのおかげでまた「田中」と書けるのがうれしい、と言っていた。

マグニ フーン。投票所に行って名前を思い出せなかったらどうするの？

私 投票所のブースの前に、候補者全員の名前が書かれた紙がはってある。

マグニ 政党や公約は？

私 公約は新聞や選挙広報で報道されます。でも、日本の場合、政党や政治的

スタンスよりも個人的関係で投票する人が多い。小選挙区制といっても、イギリスでは、政党を選ぶ投票でしょ。投票するときに候補者の名前を書かせるのは世界中で日本だけらしいって聞いたけど（注9）

マグニとオーレ そりゃそうでしょう。

私 もうひとつ変なのは、日本の高額な供託金制度。選挙に出るときに衆議院議員なら300万円預けなければならない。こんなに高額の供託金を出すのも、日本だけらしい。

オーレ 供託金？

私 デポジット。

マグニ 何それ？

私 立候補するために選管に預けるお金で、一定の票をとらないと没収される。私も危なかった（注10）。

オーレ 何のためにあるの？

私 ふざけ半分に立候補して名前を売ろうという人を少なくするのが目的らしいけど、高額すぎて庶民が気軽に立候補できない制度になっている（注11）。

「顔が小泉首相と似ている？」

川崎市議の補欠選挙は、自民党圧勝の衆院選が1月前に終わったばかりで、小泉旋風は最高潮。山内さんは、参院選補欠選挙の応援にやってきた小泉首相の駅前演説会で、大勢の聴衆を前にして短いスピーチをすることができました。

「僕は、2001年4月以来、小泉首相に少し似ていると言われてきました」

この場面を英語の字幕で観た2人は、吐き捨てるように言いました。

「なんというバカみたいなこと！（What kind of foolishness is this!）」

「なんてことだ！（What a hell!）」

「彼は市議会議員の候補者だろ。自分の顔が首相の顔と似ているだなんて、ばかばかしい。議員になろうという人がこんなこと言うなんて。いくらなんでもこれは信じられない。マリ子はどう思うんだ」

返事に窮していると、「彼はどうかしているよ。どう思うか、返事してよ、マリ子」。私は、「小泉首相と顔が似ている、考えも似ている、だから僕をよろしく、と言っているんです。人気者の首相にあやかりたいのです」と、説明しました。

「票がほしいと、おねだりしているのか！」

山内さんは、しょっちゅう走ってます。有権者のもとに駆け寄っては、自分の名前を言って、深々とおじぎをして、手をとって強く握ります。そんな山内さんですが、選挙事務所に帰ると、今度は、選対幹部らしき男性からテーブルをバーンと叩かれて「誰の選挙なんだッ」と怒鳴られて、「すみません、すみません」と頭を下げます。職場から休暇をとって手伝っていた妻が、選対の人たちから「(妻ではなく)“家内”と言ったほうがいい」「仕事を辞めたら」と言われたと不満をもらすと、彼は「何も怒ることない。ハイ、ハイ、そうですね、でいいんだよ」と妻に言います。

こんな風景にマグニとオーレは嫌悪感を抱いたようです。

「政治家は、奉仕者だけど市民の指導者でもあるんだ。指導者が、あんなに必死に走ったり、おじぎしたり、自分から握手を求めたりするのは卑屈すぎる。妻が意見を言うことまで封じたり…」

選挙最終日のシーンは駅前です。

「行ってらっしゃい、山内和彦をどうぞよろしく」
「なんとしても山内和彦を川崎市議会に送ってください。なにとぞよろしく
お願いいたします」

山内さんは、選挙区選出の国会議員や県議員、市議員、運動員といっしょに駅頭に一列に並んで絶叫します。するとオーレは、「あれは、票をほしい、とねだっているのではないだろうか。僕の理解に間違いはないか」と私に確かめます。

私自身も、2012年の衆院選中、選対幹部から、おじぎをもっと深くしたほうがいい、握手は両手を出して包むようにしろ、と教えられました。選挙最終日には私も、1票を私に入れてほしいと懇願した、と私が言うと、オーレは「そ、それは……」と絶句。

映画の英語字幕には「beg」が使われていました。begは「物乞いする、金をねだる」の意味です。卑屈なニュアンスがあります。beggarは「乞食」です。ヨーロッパでは、公道や公園で歌を歌ったり楽器を演奏したりする人に小銭を寄進する人たちを見かけますが、それは合法です。でも多くの国で、公道や公園での物乞いは禁じられています(注12)。

その昔、30代の私は、都立駒場高校教員を退職して都議会議員選挙に立候

補した時、それを母親に打ち明けると、「選挙なんて、乞食みたいでいやだね」と不機嫌になりました。その思い出を話すと、「マリ子の母は強い表現をするね」とオーレは苦笑い。

ノルウェーの2人には、政治家の物乞い姿なんて、想像を絶することのようです。

映画の中で山内さんも「別人格にならないとやれない」と言い、さらに当選後の選挙事務所では、「私のようなもののために、お忙しい中……私のような幸せ者はいません、これからは私が皆様にご恩返しする番です」と涙ながらの平身低頭です。この姿に2人の嫌悪感は頂点に達します。マグニは「彼の一連の行動は奴隷みたいだ」。オーレも続けます。

「彼の言葉は、こう言うことだ。『私はあなたにひざまずき、靴までなめましよう (I' ll throw myself at your feet and lick your shoes)』。こんなの、卑屈すぎるよ」

「物乞い」から「センセイ」に

山内さんが当選したとわかった夜の選挙事務所で、運動員らしき男性が、「これから、センセイって呼ぶんだよね」と仲間に耳うちしました。それまで怒鳴られたり、こけにされたりしてきた山内さんが、その時から「センセイ」になったシーンでした。

オーレとマグニ センセイって、何のこと？

私 ご主人様という意味の敬称。当選すると、周りがそう呼ぶの。

選挙の時には卑屈だった人も、当選すれば「センセイ」という数ランク上の人間になります。あの「甘利事件」で誰もが知ったことですが、秘書までが、行政の幹部を呼びつけたり難癖つけたりします。

市長や議員になっても以前と同じファーストネームで呼びあう人たちには、日本流の「突然の昇格」を理解できるはずがありません。でも、とにかく、一時の卑屈な儀式を耐えに耐えてしまえば、殿様のような振る舞いも可能になる。それが日本の選挙なのだ、と説明すると、

オーレ クレイジーだね。

マグニ ノルウェーとはあまりに違いすぎる。哀しすぎる。

オーレ あの人たちは、同じ人間とはとても思えない。別の惑星の生き物みた

いだ。

マグニ 何かが大きく間違っている。

オーレ 日本人にもそのおかしさに気づいている人がかならずいるはずだ。

オーレとマグニ これは変えなくては。

マグニ いや、こんな選挙とは全く違ったやり方で当選する人が出てくるはず。

私 映画で見たオリンピック選手なら名前と顔が売れているからやれる。

オーレ マグニが言ったのは、オリンピック選手とかタレントではなく普通の人間で、という意味。そういう日本人が出てくるはず！

「政策討論会がないなんて、冗談だろ」

映画が終わって2人は「映画にはなかったようだけれど、候補者同士の政策討論会はいつやるのか」と聞きます。私が「選挙期間中は、候補者が一堂に集まったの討論会はやれない。日本では法律で禁止されている」と言っても、「そんなことは絶対ありえない。冗談だよ」というのです。

私も、選挙中、候補者同士で討論会をすることはありませんでした。オーレに指摘されるまでもなく、候補者同士の政策討論会ができないと定めている日本の選挙法は間違っている、と考えています。

日本では、衆議院は12日間、市議会は1週間（政令指定都市9日）と選挙期間が決められていて、その期間前なら、もちろん、政策討論会をすることは可能です。よく市民運動団体が主催して全候補者によるパネル討論会を催しますが、これは選挙の前のことです。

選挙前の活動についてですが、現役議員は、議会での質問を印刷した「議会活動報告」を配布したり、駅前で「議会報告」と称して顔と名前を売ったりもできます。「支持者回り」と称する戸別訪問（正確には選挙違反）もOKです。訪問した家の郵便受けに「議会活動報告」を入れることもできます。

現職議員でなくても、政党の予定候補者なら、山内さんのように街頭で演説したり、知人の集まりであいさつしたりすることができます。「民主党の三井マリ子です。女性の雇用を増やし保育園増設をしたいと思っています」とスピーチするのです。すると「選挙活動」とは別の「政党の政治活動」とされます。ここで「私に1票をお願いします」と言えば「事前活動」という選挙違反になるから口に出さないだけのこと。「私に投票してください」というおねだりは言わずもがな、なのです（注13）。

私は落下傘同然の新人候補でしたので名前と顔を覚えてもらわなければいけ

ません。しかし名前の書かれたタスキをかけると「事前運動」になるので、「本人」とだけ書いて公道や駅前で演説しました。これも日本中で行われていることらしいのです。あまりに滑稽なので記念写真をとりました。



▲「本人」と書かれたタスキをかけた筆者。2012年衆院選前に秋田3区内で

こんなことを私が縷々話すとオーレが怒った顔で言いました。

「マリ子は、選挙期間が12日間で、その間は討論会ができないと言ってるんだよね？ 選挙で一番大事なのは討論だ。候補者が政策を発表して、お互いに議論しあって、そういうことを何度もやることで、有権者は初めて政策の違いがわかるのだ。日本の有権者は、どんな基準でどうやって候補者を選ぶのか。他の候補者と議論をしたり、他の候補者の考えに反対する意見を表明したりできないなんて、おかしいではないか。とても理解できない」

私もそう思う、とあいづちを打つと、さらに彼はこう力説します。

「選挙キャンペーンというのは、長期間にわたってやらなければ、人々に伝わらない。人々に判断してもらえない。つまり有権者は選択する根拠を与えられない。映画で、ヤマウチは『小泉行政改革を進める』と叫んでいた。その彼

が近所の母親には、保育園を充実させて子育てしやすくすると約束していた。そこには矛盾がある。しかし、そうした矛盾は政策の中身を詳しく具体的に説明しなければわかってもらえない。それをやるには長い選挙期間がいるし、候補者同士の討論も絶対必要だ」

民主主義指数で23位、だがしかし・・・

英誌『エコノミスト』の調査部門「エコノミスト・インテリジェンス・ユニット」が発表する「民主主義指数 Democracy Index」で、ノルウェーは2015年の世界一になりました。

世界167カ国の民主主義の度合いを5つのカテゴリ別に調べて2年ごとに公表しています。以下のような項目を10点満点で採点します。

① 選挙過程と多元主義 electoral process and pluralism :

「国会議員選挙、首相選挙、地方議会選挙が自由に公平に行われているか」
「政党の政治資金の出し入れは透明であるか、かつ一般に受容されているか」など12項目

② 政治機能 functioning of government :

「自由選挙で選出された代表が政策立案にたずさわっているか」「国会が、他の行政機関よりも上位にある最高の議決機関であるか」など14項目

③ 政治参加 political participation :

「投票率」「少数民族や少数派があげた声が政策過程に反映されるか」「国会議員における女性の割合」「政党や政治団体への参加率」など9項目

④ 政治文化 political culture :

「安定した機能的な民主主義を支えることに世論は合意しているか」「議会や選挙を無視するような強いリーダー像を望んでいるか（筆者注：望む文化だと減点）」など8項目

⑤ 市民的自由 civil liberties :

「インターネットや新聞を含むメディアが政治権力に支配されないか」
「労働組合を自由に組織化できるか」「異なる政治的意見が公開で自由に議論されているか」など17項目

先進国であるはずの日本は23位。「不十分な民主主義の国」の仲間入りです（注14）。

でも、選挙を実体験した私から見ると、23位でも評価が高すぎます。たとえば上記①の指標のひとつに「政党の政治資金の出し入れは透明であるか、か

つ一般に受容されているか」という項目があるのですが、選挙で政治資金を扱った私の実感からすると、「透明」ではあり得ません。それは、第19話までをお読みいただければ、共感していただけるはずです。

日本の選挙制度は高かろう悪かろう

日本の選挙には、「世界一の額の税金320億円」が毎年投入されています。この巨費は、「政党の健全な発展をうながすため」だそうですが、健全に発展などしていないことは、政党交付金目当ての政党離合集散だけでもわかります。

政党交付金の趣旨や名前は、「政党活動への助成金」を連想させますが、実態は別。

政党本部から政党支部に送金されたカネは、支部長の権限で支部長個人に寄附できる、つまり政治家個人の銀行口座にカネを移せます。政党交付金という名の公金は、まるで手品のように、政治家個人の私有財産に変えることができるのです。しかも、それをどう使おうと報告する義務もない。一例をあげると、秋田県の松浦大悟支部長の政党支部は、2013年7月4日付けで松浦支部長個人に1500万円を寄付しました（第18話）。2012年の衆院選で私の周辺で起きた政党交付金の不可解な流れは、第19話までに書いた通りです。

政治家個人だけではありません。2016年4月30日付けの新聞に、松本文明元内閣府副大臣が妻に対して6年間で1360万円を、「自身が支部長である政党支部の事務所家賃」の名目で支払っていた、という記事が出ました（注15）。鳩山邦夫元総務相が、事務所家賃として妻が代表する会社に2年間に2500万円支払ったと報道されたこともありました（注16）。

大臣や要職にある国会議員だからマスコミが報道するのであって、支部長が支部長自身や支部長自身の妻に公金を流すことができる、こんな錬金術が、実は日本中に蔓延しているのです。

民主主義指数1位のノルウェーと23位の日本の点数はこうなります。

	総合点	①	②	③	④	⑤
ノルウェー	9.93	10	9.54	10	10	10
日本	7.96	9.17	8.21	6.11	7.5	8.53

違いが最も大きいのは、「③政治参加の度合い」です。

「政治参加」の点数を下げている最大要因は小選挙区制度です。

小選挙区制は民意を反映しません。もし、自分の1票が死に票になるとわかっていたら、投票所に行かないのは自明の理。当然、投票率が下がります。小

選挙区制導入前、衆院選の投票率はだいたい70%を上回っていたのに、2012年、59.3%。2014年、52.66%です。

この原稿を書いていた2016年5月2日の朝日新聞に、小選挙区制の特集記事でこんな記述がありました。

14年衆院選での自民党の絶対得票率（棄権者も含む全有権者に占める割合）を見ると、小選挙区は24.49%、比例区は16.99%だ。明確な支持は5人に1人ほどしかない。

それでも自民党はいま衆院の6割余を占める。1票の格差問題で最高裁から「違憲状態」と指摘され続ける国会で改憲が語られる不条理とともに、憲法を論じる舞台が民意を反映しきれていない現状に驚く。

民意を正しく反映する最良の選挙制度は比例代表選挙です。民主主義にこだわる国々は、19世紀の昔から比例制を導入してきたわけがよくわかります（第24話）。

日本の選挙制度の致命的欠陥は「民意を反映していない」こと。にもかかわらず「公金投入額が世界一」であること。しかも、その巨額の公金は、すでに述べたように、国民のほとんどが知らない錬金術で、政治家の懐に入るのです。

先ごろ、国会では「身を切る改革」と称して、衆議院の議員定数を減らし、ついでに比例区も定数を削減する選挙制度改悪がなされました。審議日数はわずか3日でした。

「衆議院選挙制度に関する調査会」（佐々木毅代表、衆院議長の諮問機関）が出した原案に沿ったものでしたが、この調査会のメンバーはどういう基準でどのように選ばれたかも定かではないし、会議もほぼ非公開です。

民主主義の根幹にかかわる選挙制度を、こんな暗い方法で決める、その裏には少数政党の声を抹殺したい意図が見て取れます。

これで、日本の民主主義ランキングはさらに下がるでしょう。

まさに **What kind of foolishness is this!** です。

（完）

（注1） 中島通子弁護士や樋口恵子評論家らがつくった「国際婦人年をきっかけとして行動を起こす女性たちの会」に筆者は入会して性別役割分業撤廃運動をした。後、同会の労働分科会が中心となつてつくった「私たちの男女雇用平等法をつくる会」に筆者は入会。募集から退職までのあらゆるステージの女性差別を禁止する法律を求めた。集会やデモなどが多かったが、出版物には『女と平

等』（私たちの男女雇用平等法をつくる会、1983）、『働く女が未来を拓く——私たちの男女雇用平等法』（中島通子編、亜紀書房、1984）。当時、衆議院の女性議員はわずか1%。法案を審議決定する国会に男女差別に怒る女性の代表はいない、に等しかった。

(注2) 政党の候補者推薦決定会議のこと。第9話に詳しい。

(注3) 「20代のママさん国会議員」（三井マリ子著『桃色の権力』、三省堂、1992）

(注4) 「タイヘン、ママが大臣になっちゃった」（三井マリ子著『ママは大臣パパ育児』、明石書店、1995）

(注5) 「保育園待機児童いまやゼロ」（三井マリ子著『ノルウェーを変えた髭のノラ』、明石書店、2010）

(注6) 中嶋里美埼玉県所沢市議（当時）や小枝寿美子東京都千代田区議らと創設した市民団体。現代表は皆川りう子（国分寺市議）、会津もと子（千葉県成田市議）。

(注7) 本稿を書くにあたって、山内和彦著『自民党で選挙と議員をやりました』（角川SSC新書、2007）を参考にした。

(注8) 公職選挙法で走行中の選挙カーで演説などの選挙運動は禁止されているが、「連呼」は例外的に認められている。戸別訪問も禁止されている日本の“べからず選挙”の中で行える数少ない選挙運動だが、「連呼を参考に投票先を決めた人は0.4%」という調査もある（朝日新聞2015.4.21）。

(注9) イギリスの選挙では、投票用紙に全政党のロゴマークと、その政党の候補者の氏名、住所が事前にズラリと印刷されている。投票所で有権者は支持する政党の候補者名の右側に×印をつける。

(注10) 有効投票数の10%以上を獲得しないと供託金は没収される。2012年衆院選に出た筆者の供託金は没収とはならなかったが、返金されなかった。詳しくは第14話「供託金300万円の迷走」。

(注11) 比例区はさらに高く1人600万円。高額な供託金制度は立候補の自由を保障する憲法に違反するという批判も多い。供託金制度は北欧諸国だけでなくアメリカ、ドイツ、フランス、イタリアにもない。イギリスにはあるが、日本円にして7~8万円。

(注12) <http://www.loc.gov/law/foreign-news/article/norway-begging-to-become-illegal-again/>

(注13) 首長や市区町村議会選では無所属候補が多く余り問題にならないが、2016年4月北海道5区衆院選を戦った自民党公認候補と無所属候補の選挙運動の顕著な差が問題になった。無所属の場合、配布チラシ枚数や事務所数などに制限があり、政見放送もできない。しかし、民主党公認候補だったものの、筆者の選挙は、選挙事務所は1カ所のみ、ポスターは法定枚数の半分以下というケチケチ選挙だった。その不可解な選挙は第15話「供託金没収へのシナリオ」に詳しい。

(注14) http://www.eiu.com/public/topical_report.aspx?campaignid=DemocracyIndex2015

(注15) 「松本副大臣の政党支部 妻に事務所費1360万円」（朝日新聞2016.4.30）

(注16) 「鳩山議員側が妻会社に2500万円」（朝日新聞2015.3.17）